The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞須田悦生著『幸若舞の展開ー芸能伝承の諸相ー』
Author(s)	小松, 拓矢
Citation	語文. 2020, 115, p. 78-78
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88515
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

須田悦生著『幸若舞の展開―芸能伝承の諸相―』

小　松　拓　矢

近頃、「舞」という芸はいよいよ霞みつつあるように思える。祇園甲部、井上流の京舞は、春は「都をどり」秋は「温習会」と、今なお京の花街に一際の彩りを添えている。ただ花街を除いては、「舞」に触れること自体、我々から遠ざかっているように思えるのである。

本書は、別視点からの「舞」という芸能の魅力、今なお脈々と活きる幸若舞という存在を再認識させられる一書である。「読む幸若舞」としての特性をもっと重視すべきである、と序に記されるように、戦国軍記や古浄瑠璃等々のテキストとの比較を通して浮かび上がる、幸若舞独特の構成や特徴を把握しようとするその姿勢は、新たなる「舞」の一面を垣間見せるであろう。本書の章立てを次に付す。

第1章　幸若舞の形成／第2章　幸若舞芸能集団の活動／第3章　幸若舞作品の構成／第4章　『平家物語』と幸若舞作品―「敦盛」の展開―／第5章　『曾我物語』と幸若舞作品―「和田酒盛」をめぐって／第6章　戦国軍記と幸若舞―「三木」を例として―／第7章　古浄瑠璃等と幸若舞／第8章　「女舞」と幸若舞の変容―近世幸若舞のゆくえ―／第9章　甲斐で書写された幸若舞テキスト／第10章　キリシタン資料と幸若舞テキスト

第2章第三節では甲斐の一宮浅間神社近辺の芸能環境、第8章では江戸や小田原に存在したとされる「女舞」（幸若舞が「近世化」し、女が舞うようになった幸若舞を「女舞」と本書では称している）の実態にも触れており、幸若舞が各地に伝播していた事実をも詳らかにしている。戦国武将の慰みとされつつあった幸若舞は、近世期には、一部は地方芸能として伝承され、一部は「女舞」として変容し、そしてまた浄瑠璃作品にもその片鱗が脈々と受け継がれていった。幸若舞を「衰微」したとは片付けられまい、と本書で度々述べられるように、幸若舞という芸は姿形を変えて今なお歌舞伎や浄瑠璃の芝居作品の中で、日本各地の伝統芸能の中で息を潜めているのである。

海外の方々には「舞」という芸の在り方は我々よりも遥かに遠い存在に思えるかもしれない。ただ、英語、中国語、韓国語での要旨が本書末部には付してあり、国籍を問わず多くの方々が、幸若を通した「舞」の新たな魅力、密やかな息吹を感じられる一書となるに違いない。

（三弥井書店、二〇一八年一〇月、三八〇頁、九、七〇〇円）

（こまつ・たくや　本学大学院博士前期課程）